

関東大震災の復興を任された後藤新平は、稲むらの火で有名な濱口梧陵を手本としたのでしょうか？

関東大震災(1923年)の後に復興院総裁として復興計画を指導した後藤新平が、津波避難と減災の象徴的なエピソードで知られる濱口梧陵(「稲むらの火」で有名)を直接的な手本としたかどうかについては、明確な史料は確認されていません。ただし、両者には共通点が多く、後藤が濱口の精神に共鳴していた可能性は十分に考えられます。

【共通点と文脈】

項目	後藤新平	濱口梧陵
活動時期	明治・大正・昭和初期	幕末～明治初期
主な災害対応	関東大震災(1923)	安政南海地震・津波(1854)
復興・防災の思想	国家レベルの都市計画(帝都復興計画)	地域レベルの防災・減災(堤防建設など)
公益重視の精神	「大風呂敷」と呼ばれた広域・長期的なビジョン	私財を投じて地域を救済、教育・医療への貢献

【後藤新平と「手本」について】

後藤新平はドイツ医学や西洋都市計画思想に強く影響されており、彼の復興計画は都市インフラ整備・衛生・交通網整備など、近代的で合理的な視点が中心でした。つまり、彼の思想の直接的なモデルは西欧型の都市政策といえます。

一方で、後藤は**「人間の生命と尊厳を守る」ことを中心に据えた復興を語っており、この点では濱口梧陵の「利他と公共善」の精神**と通じる部分があります。特に、後藤が復興に際して市民の参加を重視したことや、私利を排して公共を優先しようとした姿勢は、濱口の行動理念に通じます。

【結論】

後藤新平が濱口梧陵を明示的に手本としたという記録はありませんが、

- 共通する公共精神
- 被災者救済と復興への強いリーダーシップ
- 長期的なビジョンとインフラ重視の姿勢

などを踏まえると、後藤が濱口のような人物を無意識的に「理想像」として共有していた可能性は高いと考えられます。
